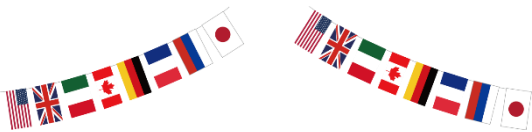


スポーツおじいさんにないたい！⑩



『コクーン』
(ロン・ハワード監督・1985)

國友万裕



1. ありがとう、マッサージの男たち！

40 過ぎてからの俺の人生は、マッサージの歴史だった。

40 になって、仕事が増え、そのため経済的には楽になったのだが、その分、体がしんどくてどうしようもない。マッサージに行ってみようか。

そう思って、最初に行ったマッサージは、西院近くの京町家を改造してなさっていた、タイマッサージのお店だった。ここのお兄さんは、当時 30 代ぐらい。柔道をなさっていたとのことで、タイマッサージにはもってこいの人だった。

タイマッサージは、ストレッチが多いし、アクロバットの的に相手に柔道の技をかけるように体をのばしてくれる。大体 90 分ぐらいのコースを頼んでいたのだが、最後の 30 分はオイルマッサージで、背中にオイルを塗ってくれていた。そして終わった後はハイビスカスのジュースを出してくれる。そういうお店だったのだ。

この人はインテリマッサージ師という雰囲気の人だった。色々なことをご存知であれやこれや教えてくれる。

オイルマッサージの場合は、当時は女性限定、男性の場合だったら女性同伴の場合のみ OK というところが多かった。

「そうしないことにはトラブルが起きるんですよ。男の人を裸にしてオイルを塗るわけですから、中には風俗と勘違いしてやってくるお客さんもいるんです。私のところにも時々、電話で男の人からオイルマッサージの依頼が来るんです。だけど、『するのは私ですよ』とその時にはまず答えることにしているんですよ」とおっしゃってい

た。

俺は、その当時、オイルマッサージに結構凝っていて、京都駅の地下にあったロミロミマッサージにも何度か行った。その時もマッサージをしてくれるのは 30 代くらいの男の人だった。オイルマッサージだから、当然、上半身は裸になるのだが、「女の人の場合だとどうするんですか」と訊くと、「女の人でも脱いでもらいます」と言われた。

そのタイマッサージの人にその時のことを話すと、「京都駅みたいな人通りの多いところだったら、男 1 人でも大丈夫なんです。ああいうところはいっぱい人が通るから、下手なことはできない。だけど、普通の場合だと、マッサージ師の人は疑いをかけられる。変なところを触られたとか言われる可能性もあるし・・・」

なるほど。お客が男性であっても女性であっても、あれやこれや難しい問題があるんだなあと思ったものだった。しかし、女性の方が意外に大胆みたいで、そのお兄さんのところにも女性の客は結構来ていた。前に鍼灸師の人も言っていた。意外に女性の方が裸になることに躊躇しないんだ、男の人の方が恥ずかしがると。それはそうなんだろう。女性の方が普段が裸に近い格好なのである。男は普段はきちんとスーツみたいなカチツとした服を着ているわけで、突然脱ぐのは抵抗があるのだ。

そのタイマッサージのお兄さんのところは結構気に入っていて、40 代の最初の頃はよく言ったものだった。ところが、2 年後くらいだっただろうか。ある時、予約の電話をかけると、「今、ちょっと風邪をひいているんです。うつしちゃ悪いんで」と断られてしまった。

そして、そのしばらく後、悪い予感がして、そのマッサージ店の前を通ると「閉店」となっていた。HP を見たところ、神戸に移ってマッサージをしていますと書かれていた。俺の勘では、おそらく、神戸に移って、雇われマッサージ師になられたのだと思う。その人、すごく腕は良かったのだが、やはり 1 人で店を続けていくというのは大変なことなのである。

そして、次に行くようになったのが、近所の鍼灸院だった。その鍼灸院に通い始めたのは、40 代半ばくらいだったと思う。それ以前にそこがまだ整骨院だった頃から時々、通っていた。ところが、俺が春休み中だったと思うのだが、行ってみると、「しばらく店を閉める」と言われた。

その院長はまだ 30 代の前半で、鍼灸の勉強をしにしばらく四国の方に行くということだった。すごく寂しかった。俺は結局、あの頃、その先生に体をいじってもらいながら、世間話するのが楽しかったのだ。閉店の知らせを聞いた時に、急に寂しさが襲って来て、実家に帰省したのを覚えている。あれが 40 代前半の頃だろうか。月日の経つのは早いものだ。

でも、それから 2 年くらい経って、その先生は四国での修行を終えて、新たに鍼灸院をそこで開かれたのである。たったの 3000 円。安かった。

鍼灸の場合も、当時は上半身は裸になるしかなかった。その後、しばらくたってから、やはり羞恥心の問題を考えてか、背中や胸だけ開けることができるような服を羽織るようになったのだが、その当時まではそういう配慮がなかったのだ。

鍼灸の場合は、気持ちがいいかどうかと

いうと微妙である。気持ちがいいのはマッサージの方がはるかに気持ちがいい。針や灸は、効果はあるんだろうけれど、どう効果が出ているのかがわからないのである。でもその先生は、マッサージもしてくれていた。しかも2時間くらいいても何も言われなかった。あそこで寝ているだけでもリラックスできた。

元々あまりお客さんが来ていないからということもあるのだが、「國友さんが来ると、いつだって僕のことを褒めてくれるからということもあって、サービスで長くしていたんですよ」と後で言われたものだった。

その先生とは性格的な相性も良かったのだが、いかんせんお客さんが来ない。あまり商売つけない人で、そこも2年くらいで、別れが来たのだ。それまで、その先生は「僕は京都が好きだから京都を離れない」ということを常におっしゃっていたのだが、娘を猫可愛がりなさっていて、奥さんが東京出身で京都の水が合わないと、もらされているライクで、娘と引き離されるくらいだったら、東京に行くしかないと思ったんですと話されていた。

その先生とは私的にも仲良しだったので、一緒に銭湯に行ったこともある。食事と一緒にしたのだ。常に金がないと言われていたので、もうお別れだから俺が奢ろうかと言ったら、断られた。「國友さんの気持ちは嬉しいけど、妻や娘に苦勞をかけているのに、自分だけご馳走になるわけにはいかない」と言われた。真面目ないい人だった。若い頃はラグビーや日本拳法をやっていたと言っていたが、穏和な雰囲気の人だった。

しばらくは東京の整骨院に勤められていたので、何度か東京に行った際に尋ねたこ

ともあった。ところが、ある時「今度また東京に行くからまたマッサージお願いします」とメールすると、もう今は鍼灸や整骨はしていない。老人ホームに勤めているんだという連絡が来た。おそらく、鍼灸師はよほどの人ででもなければ、収入がない。娘を育て上げるためには、もっと収入の多い仕事を探すしかないと思われたのだろう。

「國友さんのご活躍を心からお祈りしています」とメールの末筆に書かれていた。

もう、俺と会う気はないんだなあと思ったものだ。

その先生がいなくなってから、しばらくは近所の整骨院に通った。ここは寿司屋みたいなノリの整骨院で、威勢のいいお兄さんが5人くらいいる。伏見区にチェーン店があって、俺は両方の店で、全ての人からやってもらった唯一の客になったものだった。

そこも腕はいいし、たったの500円で相当な時間マッサージしてくれる。お兄さんたちの指は変形していて、ボーリングができないんだとおっしゃっていた。でも力のある人ばかりで、あれで500円というのは破格だった。しかし、いかんせん、次々に辞めていかれるのである。

前に蕎麦屋でばったり、そこのお店で1番のお気に入りだった人に偶然あったところ、「だって今、整骨院なんていくらでもありますもの」と言われたものだった。ああいうところは給料は安い、すぐに次が見つかるから他のところに移れる。そういう形でいくつもの店を転々として、最終的には自分の店を持ったりする人が多いのだろうと思われる。

しかし、2年くらい経つと、その店とも

終わりがやって来た。それは FB でつながっていた元スポーツクラブのインストラクターだった人が、俺のところに突然メッセージを送って来たのである。俺はその当時、体が痛くて、「痛い、痛い」と FB でぼやいていたため、「ぜひ、僕にやらせてください」というメッセージが入ったのだ。

その人は肉体労働系フリーターみたいな人で、木こり、引越しの手伝い、人力車、スポーツクラブのインストラクターともっぱら体を使う仕事をしてきた人だった。「なぜ、大学まで出ているのにこんな仕事ばかりするの？と言われるけど、こういうのが好きなんですよ」と言っていた。

彼に関しては、当時 30 歳くらいの人だったのだが、その前に彼がスポーツクラブで働いていた頃、プールで彼の身体を見て、びっくり仰天したのを覚えている。あんな見事なヘラクレスを俺は見たことがなかったのだ。

彼はそれから俺のところに週に 2 回くらい来てくれるようになっていった。この連載にも書いたことがあると思うが、彼はいっぱい、男っぽいことを味合わせてくれた恩人である。

鴨川沿いを 2 人で上半身裸で 1 時間くらい歩いたり、一緒に銭湯に行ったり、海水浴に行ったり、それまでの俺では考えられないようなことを次々に味合わせてくれた。

俺は、彼と限らず、それまでのマッサージの人から体感的に男性性を吸収していったのだった。「こういう業界は体育系の人が多いんです。身体を使う仕事だから」と前に書いた鍼灸師の先生も言っていた。

そのヘラクレスのような人との付き合いは長く、10 年以上続いた。彼は最初の頃は

独身で彼女がいなかったので、彼の方も暇で、付き合う人がいないということもあって、一緒に楽しい時間を過ごさせてくれたのだった。

ところが、奥さんができ、子供ができてからは、そういう付き合いは徐々になくなって行った。それは仕方がない。奥さんや子供の方が大事だろうから、それを責めるわけにはいかなかった。

しかし、ある日突然、ちょっとしたトラブルから彼との縁を切ることになってしまったのである。その理由についてはここでは書けない。ただ、俺は彼とは別れたけれど、彼には感謝している。

いや、彼だけじゃない。それまでのマッサージ師の人たち、全てに感謝している。俺の男の部分を目覚めさせてくれたからである。

そして今は、マッサージのチェーン店に通っていて、そこでまだおそらく 30 歳くらいの若い男の人を指名してマッサージしてもらっているのである。ここは、チェーン店だから、そうそう個人的な付き合いはできないが、たくさんいるセラピストの中で、この人が一番俺の体に合っているため、毎回指名料を払ってこの人にやってもらっている。

俺はひょっとすると本質的に体育会系の性格なのかもしれないと思う。体育会系の人と付き合っていると楽しいのだ。教え子も、これまで俺に懐いてくる子は大抵は体育会系が多かった。

しかし、俺は子供の頃からスポーツができなかったため、能力的に他のスポーツ系の男の子たちと付き合うことができなかった。そのときの辛い思いが鬱積しているのだ。日本の学校教育の問題なのである。

だから、中年過ぎて、体育系の人と裸の付

き合いができるのがすごく楽しくて、そういう人から体のケアをしてもらえるのがすごく嬉しいのだった。

時々ボクシングジムでも、そこのお兄さんにマッサージしてもらっている。そのお兄さんも最初は柔道をやっていて、それから整骨の大学に通って、整骨院を開いている人だ。

今となってはみんな俺が「運動音痴」だった過去を知らないし、そのヘラクレスの人からは、「そんな鈍いわけでもないんじゃないですか」と言われたものだった。

これはいわゆる「ラベリング現象」である。俺は子供の頃から、「運動神経が鈍い」「弱虫だ」と言われて育っているため、そのラベルに従ったような行動しかできなかった。例えば、運動部に入りたくても、「お前みたいな下手くそな奴が入部できると思っているのか」と言われるのが怖くて、自分から殻を作ってしまったのである。

しかし、今はみんな俺の運動音痴だった過去を知らない。だから、のびのびと運動できる。こんな歳になって、マッチョなことができるなんて、子供の時は想像すらしていなかったのである。

2. 久しぶりの立命館

俺の人生は非常勤のまま、終わろうとしている。

この連載で何回も言っているが、俺は立命館を卒業するときに指導教授からパワハラ・アカハラをされて、それ以来ずっと蟠っていた。指導教授だけじゃない。クラスメートからも酷い嫌がらせを受けた。あの頃の俺はまだ大学に溶け込めるような心理状態

じゃなかったから仕方がなかったのだろうけど、そうであるにしても何も自分に対して危害を与えたわけでもない人を白眼視したり、陰口をしたりするのは、彼らの方が悪いのだ。今だったら、ハラスメント委員会がどこの大学にも設置されているから、どこかに相談に行けただろう。しかし、当時は、セクハラやパワハラという言葉もない。自分の問題としてどうにか折り合いをつけるしかなかった。

俺はその後京都外国語大学の大学院に入り、その当時、外大は博士課程がなかったため、関西学院大学の博士課程に入った。渡り鳥である。立命館と上手くいかなかったのが俺にとっては致命的なガンになってしまったのである。

でも、それは遠い昔の話、もうかれこれ40年である。その後徐々に俺の京都での仕事は増えていき、人間関係のネットワークも広がっていった。今、この原稿を書いている対人援助学マガジンも中村正先生の紹介で投稿するようになっていったのだから、立命館といい加減和解しなくてはならないところなのだが、いかんせん、対人援助学会の会員の人たちは、俺とは研究の畑が違っているんで、親しくなる機会もないし、お互いに接点がないのである。だから、俺は立命館で教えることは永久にないと思っていた。

ところが、今年の2月、立命館の先生から突然、半年だけ映画の講義をもってくれないかと連絡が来たのだ。その先生とは前に映画関連の学会で一緒だっただけで、FBでつながってはいたのだが、ほとんど話をしたこともなかった。おそらく、誰も頼む人がいなくて頼んでこられたのだと思う。半期限りのピンチヒッターである。1コマだ

けならやってみようか、映画の授業だったらやり甲斐があるし、どっちみち半年だけなのだからと思って引き受けたのだった。

月曜日の5時間目、茨木キャンパスで一番豪華なドルビー教室での授業だった。3時間目までは京都の他の大学で教えているので、それが終わった後、JRに乗って、京都駅で乗り換え、約1時間弱で大学まで到着する。

蟠りが溶けるのであれば、それはそれで嬉しいことだし、溶けなかったにしても半年だけのピンチヒッターだからと思って、俺はいざ立命館に通うようになったのだった。

そして、結果は……実はどちらとも言えないのである。

正直いうけれど、もう別に立命館に来て特別な感慨も湧かず、それなりに楽しく授業はしたけれど、特別慕ってくれる子はいなかった。途中でちょっと学生とコミュニケーションのトラブルが起きかかったが、幸いなことに専任の先生が間に入ってくださって、すぐに解決した。1コマだけだったから、あっさり半期間が過ぎたという感じだった。

立命館は昔のような「貧乏な」イメージはすっかりなくなっている。キャンパスも豪華だし、学生たちも昔のように「暗い」というイメージではない。そもそもキャンパスが茨木だから、俺が通っていたキャンパスではない。だから別に思い出も湧いてこない。

それに湧いてこない方がいいのである。

たまたま、この原稿を書いているときに、Yahooのニュースで、「今なら語れる、ずっと広島が嫌いだった…古希過ぎて被爆の記憶語るうち人生の一部として受け入れられるようになった」

<https://news.yahoo.co.jp/articles/30ec8eb92e30609b76ef44ab036ea1c62ce32b78>

という記事が目に入った。

俺も還暦過ぎて、立命館の学生だったことを語ることで、「人生の一部」として受け入れるようにならなくてはならないのである。

いろいろなことで、立命館の頃の嫌な思い出をは数えきれない。俺は不登校で大検を受けて大学に入った。だから、大学のことを深く考えている余裕はなかった。どこか入れたところに行くしかない。それで立命館に入ったのだ。

何も知らなかった俺は、入学式に白いブレザーと緑色のジーンズという格好で行ってしまった。他の連中はみんなスーツだったのに、何も情報がなかった俺は、何も知らなくて、母がデパートに入学式用の服を買に行ったところ、その店員のお兄さんが、「ブレザーとかそういう格好で行かれると思います」と適当なことを言ってしまったらしくて、そういう格好で行ってしまったのだ。一人だけ浮いたような格好。上級生の奴らが白い目で見て、あれこれ笑いながら話していたという記憶がある。

さらに俺はワンルームマンションで暮らしてしまった。あの当時の立命館は学費の安い、貧乏学校というイメージを引きずっていた。だから、それを立命館に入学した言い訳にする奴も多かった。実際には俺のクラスに1人だけ、母子家庭で新聞配達をしながら通っている男子学生がいて、彼は学費が安かったから立命館に来たと言っていたが、他の子はそうでもなかった。むしろ、「学費が安かったから立命館に入ったのだ」と言ってしまう、他の大学に落ちてきたと言わずに済む。

そういう奴が多かったように記憶している。だけど、俺は元祖ワンルームマンション。そのことでストーキングされたこともあった。だから、学費が安いから立命館を選んだんだという言い訳もできなかった。

しかも、当時の立命館は少人数制を売り物にしていた。他の大学よりもクラス単位の授業が多くて、クラスの結束が硬いから友達になりやすい。それを最初に言われたことを記憶している。しかし、俺にとってはそれもガンになってしまった。

確かにクラスメートたちの結束は他の大学よりも強かったのかも知れないが、俺はそこから除外されるタイプの子だったからだ。やはり3年も引きこもって、その後1年、予備校に通ったくらいで他の子に同化することはできないのである。サークルにも上手い具合に入ることはできなかった。

しかも、女子からの集団的な嫌がらせが原因で高校に行けなかった俺が、女の子が8割近いクラスに投げ込まれた。

俺は大学に入学する前、そのことが何よりも不安だった。英語が好きだったから英語を勉強したいけれど、俺は自分が女子に「気持ち悪がられる」タイプの子だということを自覚していたので、英文科を選んだのは間違いだったのではないかという不安が募ったのだ。

すると、俺のはとこに当たる女性はいったものだ。

「大人しいタイプなんだから、女が多い方がいいじゃないの。男が多いと上下関係厳しくなって大変よ」と。

彼女は女性の暴力性みたいなものに気がついていない。女の方が優しいみたいに思っている。でも、それは俺みたいな「最下位

男子」には当てはまらない。最下位男子に対しては女子の方が過酷なのだ。

事実、やはり女子たちからの悪口影口は1年生の秋ぐらいから始まって行った。この頃、「引き寄せの法則」ということがしばしば言われる。「悪いことを想像すると悪いことが起きる」という考えである。しかし、あの当時の俺はできる限りポジティブに考えようと一生懸命に涙ぐましく頑張っていた。だけど、やはり女の子の悪口は始まっていった。今でも、俺が「引き寄せの法則」を必ずしも信じないのはそのせいなのである。

本当にあの当時は幸運の神様が完全に俺に背を向けていたのである。もう何から何までが裏目に出たという4年間だった。

唯一、俺が好きだったのは、立命館高校出身のやつらだった。俺はそういうやつが基本的に好きなのだ。3年生くらいになって、やっと彼らと多少は友達になれて、少し良い思い出ができたものだった。でも所詮、俺は付き合ってもらっていたのである。一般に付属校系のやつらは意地悪ではない。それは他の大学でもそう。だから俺みたいな変なやつにも偏見を持たずに接してくれる。

しかし、彼らとも卒業してからは会っていない。32歳の時だったと思う。立命館高校出身で高校の先生になったやつが、大学時代から付き合っていた彼女と結婚して京都外大の近くのマンションで暮らしていた。俺はあの当時外大で教えていたので、ばったり彼女と会った。彼女は乳母車を押していた。男の子だった。

「私のところはもうこれ以上は子供は作らない。この子一人だけにしようと思っているの」と言っていたのを覚えている。

それが大学時代のクラスメートと会った

最後なのである。すなわち、もう 30 年ぐらい彼らと会う機会はないまま、電話で話すことも、SNS で繋がることもないまま、30 年が過ぎたのだ。

もうあの男の子も 30 歳ぐらいになっているのだ。ということは、もうクラスメートたちはお爺ちゃんお婆ちゃんになっているのだろう。

SNS の時代になって、検索すれば大学時代に知っていたやつの何人かは引っ掛かるだろう。しかし、俺はもう大学時代の奴らとも会いたくないのだ。彼らの方も俺のことなんか忘れているだろう。

もう永遠に会わない方がいい。自分にとって不都合な過去は断捨離した方がいいのだ。

3. 熊本から京都へ

10 年ぶりに俺の故郷で地震が起きた。

何の罪のない人がたくさん死んでいるのに、こんなことを言うのは不謹慎極まりないということはわかっているのだが、俺は熊本が嫌いだ、九州が嫌いだ、とりわけ九州の女が嫌いだと言うことは俺が親しい友達にはみんな知っている。

この連載にも何度か書いてきた通り、俺の心に一生消えない傷を残したのはまずは熊本の女たちだったのだ。俺は子供の頃から、最下位男子だったため、女の子からも馬鹿にされるタイプの子だった。おばあちゃんから虐められた。小学校の時の女性教師の体罰に悩まされた。中学の時は集団的ないじめを女子から受け、わざとクラス委員に選出された。まともに話せない、発達障害的な子だった俺をクラス委員にしてみんなで面白がろうという作戦だったのである。

なのに、フェミニストは女に罪はないという。

今から 12 年前、エマ・ワトソンの国連スピーチは大きな話題になって、彼女はここで男性問題にも同等に言及しているのだが、あるジェンダーの先生の話だと、もうその余韻も消えてしまい、また再び、女は悪くない理論、女は可哀想理論が復活している、男の被害なんて認めないそういうフェミニストが多いとのことである。

本当にフェミニストはしぶとい。おそらく、そういうフェミニストはもうおばあさんだから、もうそうそう長くはないのだろうけれど、依然として彼女たちが存在している間は、男性被害の問題は日の目を見ないのである。

しかし、熊本で生まれたことは一つの運命だったのかも知れないと思う。俺は、同志社教会で洗礼を受け、クリスチャンとなり、礼拝に通っているが、同志社教会の設立には、熊本バンドが大きく関わっているのだ。熊本バンドとは、熊本洋学校の生徒たちのことで、米国人教師ジェーンズの影響を受けて、プロテスタントに改宗し、熊本洋学校が閉校となった後は、新島襄の同志社英学校に移って、同志社大学の基礎を築いたのだそうである。

同志社の礼拝で説教を聞いていても、熊本バンドの名前はしょっちゅう出てくる。この人たちは、熊本から京都に来た人であり、俺と同じルートを辿った人だ。しかも、同志社に深く関わった人なのだ。

俺は、同志社で嘱託講師として勤務するようになって、もう 30 年。たくさんの学生を教えてきたし、同志社女子大学でも教えている。同志社教会にも通っている。同志社のボランティアガイドにも参加するようになり、ほとんど毎日、同志社に通うような生

活だ。死んだ後は同志社のクリスチャンの人たちが眠る墓地に入れてもらおうと思っている。もうほとんど同志社が本拠地になってしまっているのである。

立命館で教えたこの半年間も、はるかに同志社の方が自分の居場所だなあと感じたものだった。同志社だけじゃない。龍谷大学や京都大学、京都女子大学ももう長く教えているため、はるかに立命館よりも自分の居場所になってしまっている。

半年間教えてみて、もう立命館のことは遠い昔の人生の一部になってしまっていることを痛感したのだった。思えば、辛い4年間。何もかもが上手くいかなかった。

中村正先生みたいに、生え抜きで、自分の母校の教授になって、それを全うして名誉教授になれる人というのはある面羨ましい。スムーズにずっと走ってきた人生という感がするからだ。

しかし、俺はつぎはぎの人生。色々な大学を経験して、凸凹道をどうにか歩んできた人生だった。でも今となっては、色々な大学を知ることができたということは良かったのかも知れない。立命館では上手くいかなかったけれど、他の大学ではそれなりに上手く行って、今年の8月は京大の学生たちと食事した。同志社の体育系の学生ともこの後、食事する予定である。龍大の子でも慕ってくれる子はいる。同志社女子大学の教え子には、銭湯でバイトしている子がいて、「先生、一回来てください」と言われている。でも、銭湯はちょっと、女子学生の前でお風呂には入れないなあー（笑）。京都女子大は優しい子が多いから、スムーズに授業ができる。

他にもかつては京都外国語大学、近畿大学、摂南大学、帝塚山学院大学と色々なところ

ろでお世話になってきた。それぞれの大学はカラーが違っていて、今思えば、全ていい思い出。正さんみたいにずっと1つのところでまっとうできるのもいいけれど、次は義に色々なところで教えられたことも、一つの味わいのある人生なのだ。

4. 『コクーン』(ロン・ハワード監督・1985)

この頃、お風呂に入るときに自分の体を見ると、つくづく爺さんの体になってきたなあと思う。

今更、ムキムキのマッチョにはなれないだろうと思う。でも歳をとった爺さんの体もそれはそれで味祝いがあるのだ。様々な年輪が衰えた体に染み付いているからだ。

そんなわけで、今日は『コクーン』という映画を思い出した。この映画は老人ホームにいる爺さんたちがプールで泳ぐ場面が出てきて、俺はこれからこういうのを目指さなきゃいけないんだなあと思って、配信のデータを買ってしまったのである。

この映画、1985年の映画。ちょうど、大学生活が上手くいなくて苦しかった時代の映画である。あの頃に比べれば、今はずっといい。

苦しかった立命館での大学生活も、ここに辿り着くまでの「人生の一部」だと思えば、それで構わない。

もちろん、これからの人生でもっと辛いことが待っているかも知れないけれど、どういう人生であっても、それはそれで味があるものなのだ。つくづく、そう感じる世代となったのだった。